

碓家の栄光 リメイク

宇宙戦争

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何処までも紅い世界・・・

そこに佇む一人の少年は全てを奪われた。

そんな時、少年は過去へと戻る方法を見つけ、贖罪と復讐を誓う。

だが、彼が過去へと戻る副産物によって2つの世界線から少年の世界へと転移してくる者達が居た。

少年と彼らが交差する時、物語は始まる・・・

目次

設定	1
序章	6
第壹話 対面	17
第貳話 機龍、登場	35

設定

登場人物

碓 シンジ 14歳 階級特務三佐

赤い海の中から『アーク』を見つけ、それを宿し、それを使って、サードインパクトから碓ゲンドウに捨てられた直後の時間に逆行してきた。組織的な力を求めて祖父である碓ゲンイチロウの元へと向かう。そして、アウローラ財団を祖父から継ぎ、碓家当主となる。そして、一流プロの指導を受け、格闘技術が逆行前と比べて強くなっている。階級は特務三佐。能力は『現象否定』、『聖跡』。

碓 ゲンイチロウ 71歳

碓シンジの祖父にして碓ユイの父。前の歴史では碓ゲンドウの謀略により2013年に死亡したが、この歴史では碓シンジと碓ユウキの介入により防がれた。前の歴史ではゼーレを脱退しようとしたものの、なかなか踏ん切りがつかなかったが、この歴史ではシンジとユウキからゼーレの裏側を指摘され、ゼーレの脱退を決意した。

碓 瑠璃 21歳 階級特務三将

碓ゲンイチロウの末娘。特務機関ルシフェルの副司令。シンジとユウキの姉的存在。

碓 ユウキ 17歳 階級三佐

シンジが逆行した際の副産物で現実世界から転生してきた転生者。高い戦闘能力を誇る。戦闘指揮能力も高く、特務機関ルシフェルの作戦参謀兼「機龍」のパイロットである。シンジの兄的存在。『翠』の所属。能力は『氷の加護』。

アイリ

碓ユウキのヒロイン。ユウキの能力である氷の加護の精霊。モデルは最弱無敗の神装機竜に出てくるアイリ・アーカディア。

織斑 一夏 14歳 階級一尉

何をどう努力しても姉の付属品として見られ絶望していたが、10歳の時に突然この世界に転移した。そして、シンジ達に拾われる。やがて、碓家に忠誠を誓う様になる。『白龍』のパイロット。『蒼』の所

属。能力は『風の忍び』。

桐ヶ谷 和人 14歳 階級二尉

基本的に原作通り。しかし、コンピュータプログラマーとしての才能を開花させる。アウローラ財団の技術部門に所属する。『白』の所属でもある。能力は『電子制御』。

野比 のび太 14歳 階級三尉

転移した経緯は次の通り。

The dawn後↓エヴァ世界の2012年に転移。

射撃の腕を買われ、『紅』に所属する。だが、ロボット部門の才能がありそれが開花すると、アウローラ財団のロボット技術部門の仕事も請け負う様になる。『紅龍』のパイロット。能力は『無限の銃』。

有明 彩美 16歳

『翠』の所属。碓ユウキの腹心でもある。非常に優秀な頭脳を持ち、単純な格闘能力であれば『五聖』最強。

神谷 洋一 51歳 階級一将

特務機関ルシフェル司令。元々は国連軍・極東方面軍司令。非常に優れた軍人で、落ち着いた性格。

六分儀 ゲンドウ 48歳 階級二将

特務機関ネルフ司令。この物語では、2009年に碓家から追放されている為、六分儀性となっている。

神崎ダイスケ 34歳

トライデント部隊の司令。

佐藤カオリ 30歳

トライデント部隊の副司令。

以下、殆ど原作通りだがオリジナルエヴァパイロットが登場して来る。

登場組織

アウローラ財団

碓財団を中心とする企業郡。戦前、戦中は大した企業ではなかったが、戦後の財閥解体によって一気にその頭角を表した。所謂、戦後

企業”。その後、1956年にゼーレの一派となった。アウローラという名はそこから来ている。前の歴史では碇ゲンイチロウの死後、ゲンドウが資産を横領し、自分達^{ネルフ}のE計画につき込んでしまう。この物語ではユウキや逆行シンジの介入もあり、2005年にゼーレを脱退している。

五聖

アウローラ財団の実行組織。警護担当の『蒼』。大規模戦闘・破壊工作担当の『紅』。防諜担当の『白』。諜報・暗殺担当の『黒』。対超能力担当の『翠』。

騎士団

キール・ローレンツ直属の暗部組織。構成員は少数だが、戦力的には五聖を上回る。

ゼーレ

世界を裏から支配する秘密結社。ネルフの上部組織。日本を含む全ての先進国に影響力を持っている。

ネルフ

国連直属の非公開組織。対使徒迎撃機関として発足し、ゼーレの下部組織である。司令は六分儀ゲンドウ。

ルシフェル

ネルフに対抗して国連の一部の国が発足させた対使徒迎撃機関。アウローラ財団がスポンサーになっている。主に国連軍・極東方面軍で構成されている。司令は神谷洋一。

戦略自衛隊

2003年に発足した日本独自の防衛組織。但し、ゼーレの影響を強く受けている部署もある。

日本国

日本国。国連内で唯一の中立。理由としてはネルフ本部が置かれるだけあり、確かにゼーレの派閥の影響力は強いが、アウローラの本社が日本にあるので、アウローラの意向を完全に無視は出来ない為と日本経済の景気回復への恩がアウローラにある為。2015年時点で人口8500万人（前の歴史では7500万人）。

国連

国際連合。中立と呼ばれる国が殆ど無く、親ゼーレ派と親アウローラ派にぱっくりと別れている。ちなみに親ゼーレ派と親アウローラ派の比率は開戦時で8・2。

国連軍

国際連合所属の軍。その6割を占めるアメリカがアウローラの陣営に着いた為、アウローラの影響力が強い。

ローレンツ財閥

世界三大企業の一つにして、ゼーレ最大の企業。

統和機構

超能力等を裏で管理する機構。一般には知られていないし、ゼーレとアークも詳しくは知らないが、『翠』は何度もこの組織の構成員と殺し合いをしている。超能力者や改造人間が構成員の大半。

登場用語

アテナ

アウローラ財団が開発したハイパーコンピュータとも呼ぶべき代物。人工頭脳(AI)が搭載されている。そして、総合的な性能は世界のスーパーコンピュータが束になっても、敵わないと言われている。特務機関ルシフェルで運用される。

アーク(方舟システム)

碓家が代々守護する古代のコンピューター。不思議な所は人間の脳に刷り込む事が出来ると言う事。但し、普通の人間では触れるだけで廃人になってしまう。性能は、アテナを設計図を作ってしまう事からも分かる通り、極めて高い。前の歴史では、ゼーレに奪われてしまう。そして、ダミープラグやロンギヌスの槍のコピー等も此れで作られていた。又、能力による精神干渉の拒否や五感から入る情報の解析をする事が出来る。名前は名探偵コナンに出てくるノアズ・アークから。

アークネットワーク(ANW)

アークを刷り込まれた人間同士のみで、情報を共有したりする事が

出来る。現在、このネットワークを使用出来るのは、碓シンジ、碓ユウキ、織斑イチカ、桐ヶ谷カズト、野比ノビタの5名。参考はとある魔術の禁書目録のM N W（ミサカネットワーク）。

機龍シリーズ

特務機関ルシフェルの対使徒迎撃兵器。アウローラ財団が、1954年に出現したとある怪獣の骨を元に作った。二番機以降は、その骨のコピーで作られている。

戦闘衛星

アウローラ財団保有の衛星兵器。ミサイルなどを主に搭載している。

バリアミサイル

その名の通り、空中でバリアを発生させるミサイル。現在、更なる改良が続けられている。

聖器

ゼーレが保有する聖遺物。これの洗礼を受けて生き残った者は、聖人となる。但し、2015年までで生き残った者は4名しかいないと言われている。

聖痕

シンジが保有した能力。使用時に掌から紅い紋章が浮かび上がり、とてつもない力を発揮する。某不幸な右腕を持つ少年の物語に出てくる聖人と変わらない能力を有する事が出来る。

現象否定

発動時に置かれている現象を否定出来る能力。例えば、銃弾が当たるといふ現象を否定する等。使用時に掌から白い光が浮かび上がる。ただし、実像のあるものを否定する事は出来ない。例えば、銃弾そのものを否定する等。欠点として、発動までに若干のタイムラグがある。

氷の加護

碓ユウキが北欧で獲得した能力。氷の能力が使える。碓ユウキはこれを手足の様に扱える。必殺技は使徒戦開始時点で“絶対零度”アブソリュートゼロを保有している。

序章

何処までも紅い世界。

生命らしきものは存在せず、まるで世界の終わりの様な光景だった。

いや、それも強ち間違いでも無いのかもしれない。

何故なら、人間は1人の少年以外誰も居ないのだから。

そんな中で取り残された少年が味わうのは孤独。

深い孤独だった。

だが、少年は諦めていなかった。

少年は過去に戻る方法を探していたのだ。

世界をこの様にした大人達への復讐。

そして、自分が救えなかった人間達への贖罪の為に。

それから暫くして、努力が遂に実ったのか、過去へと戻る方法を見つけた。

「これで・・・今度こそ僕は・・・」

その先は言わなかった。

だが、去り際に少年はこう言った。

「さようなら」

それは過去の自分、そして、過去の自分が世話になった者達への決別の言葉だった。

こうして、少年は過去へと渡った。

だが、この時点で少年は知らなかった。

少年が過去に戻る事で2つの世界から転生者と転移者を呼び込んでしまうという事を。

◇西暦^A2015年 6月22日^D

夏の日差しが照らす中、茶色の塗装をした数十両の戦車が海岸線に展開しながら海の方角に砲門を向けていた。
そして・・・“それ”は現れる。

ザッバアアアアアアアン

“物語”の幕は上がる。

その先に待つのは、滅亡か存続か。
今は誰も知らない。

◇第3新東京市 某所
第3新東京市。

学問、学術都市として2006年に神奈川県箱根を中心に建設され、2010年に完成した世界最大の近代都市である。

と言うのは表向きの話で、実際には使徒迎撃の為に建設された要塞都市であった。

しかし、未だ完璧には完成しておらず、所々に工事の跡が見受けられる。

そんな街の某所に1人の少年が立っていた。

片手には携帯——この世界のこの時代には存在しない筈のスマートフォンを手に、ある人物と秘匿回線にて会話をしていた。

「そうですか。此方が“先攻”ですか・・・」

『ああ、連中、これを機に我々の陣営を切り崩したいんだろう。敢えて“後攻”を選んだのもその証拠だ。俺達に“恥”を掻いて貰って、ネルフが使徒を殲滅、という筋書きだろう』

相手は吐き捨てる様にそう言った。

だが、少年は気にする事無く、肝心な事を聞く。

「“例の機体”で対処は可能ですか？」

言外に少年が創ったシナリオは可能かと相手に問う。

だが、現実はそう甘くは無い。

『・・・・・・・・・・難しいな。せめて“あれ”が手に入ればなあ』

「・・・・・・・・・・」

少年の顔に苦悶の表情が浮かぶ。

だが——

『・・・・・・・・・・1つ、賭けだが、考えがある。それが出来れば、使徒を跡形もなく殲滅出来る』

「……………任せます」

賭けと聞いて、若干の不安はあったものの、少年は結局了承する。もはや、形振り構って居られないのだ。少なくとも、彼らのシナリオでは。だが――

「それで、『向こうのシナリオ』は？」

『……………前の歴史と変わらず、だ』

向^ネル^フ向^フこのシナリオにはまだ余裕がある様だ。

その事実が少年の心に少しのひびを入れる。

もつとも、表面上はおくびにも出さなかったが。

「……………分かりました。では、後の事は予定通りに」

『ああ、予定通り。例の場所。で会おう』

相手はそう言った後、電話を切ったらしく、少年の耳に掛かる電話からはプー、プーという音が鳴る。

少年はそれを確認するとスマホの電源を切り、後ろポケットへと締まった。

「……………ふう」

少年は目を瞑った。

そして、目を開くと、ある方向を見た。

そこには蒼銀の短い髪にルビーの様な紅い瞳をした少女が立っていた。

少年は少女を見ると、緩やかな表情を浮かべる。
少女もその紅い瞳で少年を見つめる。

しかし、その時、1つの強い風が靡いた。

それなりに強い風に少年が再び目を瞑ってしまった。

そして、風が治まり、再び目を見開いた時には、少女は消えてしまっていた。

「綾波・・・」

少年はそう呟き、ある決意を胸に第3新東京市のとある場所に向かって歩いていった。

その少年の名は碓シンジ。

少年は1度全てを奪われ、それを奪還する為にこの世界に舞い戻ってきた。

その中には先の少女も含まれている。

だが、含まれていない人間はどうなるのか？

それを知る者は少年以外には誰も居ない。

◇同日 ネルフ本部 特務機関ルシフェル区画
第2特務機関ルシフェル。

それはネルフと同じく使徒殲滅の為に設けられた対使徒迎撃機関である。

しかし、本来、同じ用途の特務機関を2つ用意するのは非効率この

上ない。

にも関わらず、ルシフェルが創設された理由とは、はっきり言えばネルフが信用できないという国が出てきたからである。

度重なる使途不明金の要求、特務権限の乱用などネルフの行動には問題が相次いでいた。

この問題に、アメリカや中国などの大国を中心とした一部の国々の堪忍袋の緒が切れ、ネルフとは別の第2特務機関の創設を求めた。

これが小国の国々ならば黙殺されていただろうが、セカンドインパクトである程度衰えたとは言え、腐ってもこの2カ国は大国であった。

その為、完全に無視は出来ず、国連は第2特務機関創設を認める事となった。

こうして特務機関ルシフェルは産声をあげた。

と言うのが、大雑把に纏めたルシフェルの創設経緯だったが、第2特務機関であるが故の制限も掛かっている。

例えば、ネルフとルシフェルが戦自に何かしらの特務権限による徴発などを行う場合、先任機関であるネルフが優遇される事や使徒殲滅の“先攻”と“後攻”についての決定権も、ネルフの意見が優先される。

また、ルシフェルの本部は国連内で予算節約という観点から、ネルフ本部内に建設されている為、情報収集などの点でもネルフに苦戦を強いられている。

勿論、ルシフェル区画設置途中にネルフによって仕掛けられてあった無粋な物は『白』によつて全て撤去されてあったが、何時また仕掛けてくるか分かったものではない。

閑話休題。

第2特務機関創設の考案は1人の少年がアウローラ財団の会長であるシンジに進言した事が始まりとなっている。

その少年の名は碓ユウキ。

シンジが逆行した際の副産物として“現実世界”から転生してきた男であった。

ちなみに先程、シンジと連絡を取り合っていたのもこの人物である。

「さて、と。俺も準備しなくちゃな」

シンジとの電話を切ったユウキはそう呟いた。

そんなユウキに先程からその傍らに居た少年が声を掛ける。

「今の連絡。シンジ様からですか？」

「まあな。俺は『例の機体』で出撃準備を始める。その間、『特殊作戦隊』の指揮はお前が取れ」

「了解しました。いよいよ、『シナリオ』の開始ですか」

「ああ。些か、予想外の部分も有ったが、概ね当初のシナリオで行く」

「ええ、それは承知していますが・・・それにしても、ネルフと『老人会』の連中、我々を嘗めきっていますね」

「まったく。まさか、この時点になっても式号機をドイツから取り寄せていないとは・・・」

ユウキにとって、この時点で式号機が存在していないのは想定外であった。

何故なら、ユウキは彼らゼーレの本来のシナリオ………に存在しない筈ルシフェルの存在に驚異を感じて、第3使徒襲来時サキエルまでには、式号機をドイツから本部に回すと予想していたからだ。

ところが、実際はそんな処置は何も成されず、肩透かしを喰らってしまう形となった。

「…………まあ、兎に角、我々はシンジ様の立てられたシナリオに従いましょう」

「…………そうだな。じゃあ、頼んだぞ。」

織斑一尉」

◇同日 第3新東京市郊外 ネルフ前線指揮車両
14式大型移動指揮車。

ネルフが前線用に開発した車両で、エヴァを第3新東京市外で運用

する事を想定されて造られたものである。

今、そこでは複数のオペレーター達がキーボードを忙しそうに叩きながら情報収集に勤めていた。

そして、1人の眼鏡を掛けた男が上司である若い女性？に報告を行った。

「葛城さん。戦略自衛隊の戦車部隊が壊滅。海岸線の防衛線は突破された模様です。特化部隊並びに航空隊が攻撃を続行していますが、全く効果は見られません。・・・やはり通常兵器ではなんの効果も有りませんね」

「そう・・・やっぱりね」

不謹慎だが、2人は何処と無く安心したという雰囲気醸し出していた。

当然だ。

ここで通常兵器での効果が見られれば、莫大な予算を費やして対使徒戦の装備を整えてきたネルフの立つ瀬が無い。

「で、いつ頃こつちに指揮権が来そう？」

「もう少しかと、通常兵器の効果が見られない以上、引き上げるしか有りませんし・・・」

2人がのんびり話していたその時、1人のオペレーター——青葉シゲルが叫んだ。

「葛城一尉!!航空部隊と特化部隊が急速に撤退していきます!!」

「・・・指揮権がルシフェルの連中に移行されたの？」

今回、戦略自衛隊が敗退した場合、指揮権譲渡はネルフではなく、ルシフェルに移行される事が決まっていた。

もつとも、女——葛城ミサトとしては、ルシフェルも戦略自衛隊と変わらない結果しか得られないと考えていたが。

何せ、公式にはルシフェルは「通常兵器しか」保有していないのだ。

自分達はエヴァンゲリオンを有し、使徒の研究を重ねてきた。そういう自負が彼女の中には有った。

「いえ、違います!!どうやら、N2地雷を使う様です!!」

「何ですって!!!」

流石にこの報告にはミサトも慌てた。

N2地雷。

原爆以上水爆以下の威力を持ち、放射能を排出しないN2兵器の地雷型だ。

2001年に施行されたバレンタイン条約によって、使用時に制限が掛かるが、「放射能を放出しない」という点から、戦略自衛隊や国連軍にも配備されている。

ミサトが慌てたのは、N2地雷を使う位置だ。

この段階で撤退するという事は1つの街ごと使徒を吹っ飛ばすと言っているのに等しい。

何せ、使徒は現在、その街の入り口に入り掛かっているのだから。まさか日本固有の軍である戦略自衛隊が、そういう決断をするとは、ミサトも思わなかったのだ。

。だが、そんなミサトを他所に、眩い光が轟音と共に14式大型移動指揮車まで伝わってきた。

オオオオオオオオオオオ

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

!!!!!!!~~!!~~!!

この日、1つの街の存在が消滅した。

第壱話 対面

ルシフェル側区画秘密格納庫

戦略自衛隊のN2兵器使用に驚愕を覚えたのは、何もミサト達ネルフだけでは無かった。

この格納庫で“ある機体”の出撃準備を行っていたユウキもその報告を受けた時、愕然とした。

(くそっ!!戦自の連中め!!余計な事をしやがって!!!)

使徒は攻撃を受ける事で学習し、その機能を高める。

原作知識からその事をよく知っていたユウキは余計な事をして第3使徒を強化している戦略自衛隊を内心で罵りつつ、対処策を考えた。

(確か原作では国連軍のミサイル攻撃でパイルバンカーを、この攻撃でビーム攻撃を覚えたんだっただな…….) となると、この作戦に“あれ”を投入する数を増やす必要が有るな)

ユウキはそう考え、同時に馬鹿な事をしてくれた戦自に内心で舌打ちをしつつ、思わず溜め息を着いた。

そんなユウキの様子を見た作業服を着た1人の眼鏡の少年がユウキに声を掛ける。

「ユウキさん、どうかしましたか？」

「……いや、何でも無いさ。それより、この機体の整備は終わったか？」

「あ、はい。何時でも出撃出来ます」

「分かった。ありがとう」

眼鏡の少年——のび太に礼を言いつつ、ユウキは機体を見上げた。それは1954年に突如として東京を襲い、芹沢博士のオキシジェン・デストロイヤーによって葬られた怪獣の容姿にそっくりであった。

唯一、違う所と言えば、当時の怪獣が生物的なものであったのに対して、この機体は機械的なものである事だろうか。

「……………『機龍』」

ユウキはその機体の名前をぼそりと口にした。

◇同日 ネルフ本部 第2発令所

ネルフ本部には2つの発令所が存在している。

普段、ネルフが使用している第1発令所。

……………そして、予備として造られたのをそのままルシフェルが司令部とした第2発令所である。

そこでは戦略自衛隊の高官達が対使徒戦の戦闘を指揮していた。

……ちなみに第2発令所で指揮している理由は、戦自が敗れた際に、すぐに特務期間ルシフェルに指揮権を委託する為である。

「やったぞ!!」

「どうだ！これが我々の切り札だ!!」

戦自の高官の1人が自慢気にそう言った。

先程まではなかなか効果が出ないミサイルや砲爆撃の攻撃に苛立っていたが、N2地雷が爆発すると歓喜の声を上げた。

確かに単純な破壊力ならば、N2地雷の威力には目を見張るものがある。

「……………」

だが、特務機関ルシフェル司令である神谷洋一は厳しい表情でモニターを見たままであった。

「映像、回復します!」

そこに映っていたのは、多少のダメージを負ってはいたが、どう見ても無事に見える使徒の姿だった。

そして、次の瞬間、使徒を撮影していた無人偵察機は使徒が新たに覚えた荷粒子砲によって撃墜された。

「馬鹿な……………」

「我々の切り札が……………」

「化け物め!!」

1人の将官が机を叩くのとほぼ同時に、デスクの上に置かれた電話が鳴った。

将官の1人がそれを取る。

神谷の活を入れる宣言の前に、職員達は士気を上げ、各々の仕事を進めていく。

「ルリ君、例の機体は？」

神谷は一通りの指示を出すと、後ろに居る特務機関ルシフェルの副司令、碓ルリに向かって尋ねる。

「先程、連絡があり、何時でも発進可能だと言っておりました。それと、『保険』の方も」

「分かった。では、準備出来次第、私の指示で何時でも発進出来るようにしておいてくれ。『保険』の方は君達に全て任せる」

「はっ、承知しました」

ルリは見事な敬礼を行い、行動に移していった。

◇同日 ネルフ格納庫

少年は再びこの場所に立っていた。

エヴァンゲリオン初号機。

紫と緑の色が混じった一本角の鬼のような形をした人造兵器。
そして、「かつては」人類の決戦兵器とされ、人類最後の希望とされた兵器。

「エヴァンゲリオン初号機、人類の決戦兵器よ」

金髪の女性——赤木リツコの説明があつたが、少年は殆ど聞いていなかった。

別の事に気が向いていたからだ。

(母さん)

この機体に取り込まれた少年の母の名前。

そして、少年の父親である碓ゲンドウが悪魔に魂を売った切っ掛けになつた女性の名前。

それらの事実が少年の頭の中でぐるぐると回る。

だが、既に悲しみの感情は持っていなかった。

否、持つ事は許されなかった。

かつての親友を事実上殺し、「今」の友達、仲間、愛しい人の命を奪おうとする元凶になっているのだから。

そして、元凶の1人の声がゲージに響く。

「久しぶりだな

シンジ」

少年——碓シンジはゆつくりと上を見上げる。

そこには傲岸不遜に立っている大人が1人。

六分儀ゲンドウ。

シンジの血縁上の父親であり、かつては碓ゲンドウと呼ばれていたが、10年程前に碓の姓を剥奪された相手だった。

先程の言葉にも、かつての息子に対する敬意など籠っていないかった。

有るのは、ただその傲慢な態度のみ。

だが、シンジにはこう言っているようにも思えた。

『かかってこい』
と。

なので、その態度に敬意を表してシンジも言葉を返す。

「久し振りだね

六分儀ゲンドウ」

心なしか、ゲンドウの顔に少し変化が有ったように思えた。
それは『六分儀』という名前に対するものであったのか？
それとも、息子が自分の想定よりその精神が弱体化していない事に
驚き、それによる自らの計画に対する失敗に対する恐怖か？
それは分からなかった。

「フツ、出撃」

「・・・何を言っているの？」

シンジが呆れたような反応を見せると、リツコが説明する。

「碓シンジ君、君がこれに乗るのよ」

「僕が、ですか？」

「そうよ」

それを聞いたシンジは再びゲンドウの方を向き、こう言った。

「なんで僕を呼んだの？」

「お前しか居ないからだ」

「つまり、僕しか乗れないと？」

「そうだ！」

ゲンドウのその返答にシンジは一瞬だけ沈黙して、すぐに返答する。

「・・・もう一度、聞きますよ。本当に僕しか居ないんだね？」

「そうだと言っている!!」

立て続けの質問に少し苛ついたのか、声を荒げるゲンドウ。

だが、シンジは一瞬だけ俯き、再びゲンドウの方に向くと、こう言った。

「分かった」

それを聞いたゲンドウは勝利を確信した。

そして、こう思った。

『所詮は子供だったか』
と。

そう思う事で、自分の精神を安定させた。

だが――

「お願いします」

シンジが懐に手を伸ばして“何か”を取りだし、そう呟くと、

ダツダツダツダ

ゲージの入り口から幾人もの兵隊が入ってきた。

「なんだ！お前達は！！」

見れば、ゲンドウが居た部屋にも兵隊が入り込んでゲンドウを拘束する姿が見えた。

そんなゲンドウにも構わず、ゲージの兵隊達は次々とリツコを含めたネルフ職員を拘束していった。

中には抵抗しようとする人間も居たが、あっという間に叩き伏せられる。

そして、一通り拘束すると、首元に一尉の階級章を着けた少年が入ってきた。

「特務機関ルシフェル警備部、第2部隊隊長の織斑です。特務機関ネルフ司令の六分儀ゲンドウ特務一将ですね？」

「貴様ら、こんな事をして、許されるとでも？」

ゲンドウは拘束されつつも、凄みを持って下に居る一夏を睨むが、一夏は意に返さなかった。

「只今の使徒迎撃指揮権は我々特務機関ルシフェルが有しています。よって、現在の特務権限は我々に有ります」

「・・・」

「今回は我々の人材を強制的に徴収しようとした件で防衛措置として、臨時に特務権限を発動させて頂きました」

「なんだと？」

この子供は今、何と言った？

ルシフェル側の人間？

いったい誰の事だ？

ゲンドウの頭の中ではそれらの考えが渦巻いていた。

それを見越したのか一夏はニヤリと笑うと、ある人物を紹介する。

「改めてご紹介しましょう。『昨日付け』で特務機関ルシフェルに配属される事になった碓シンジ特務三佐です」

「!？」

「あつ。それと、あなた方が国連に提出した碓三佐の強制徴兵要請書ですが、先程棄却されましたので、悪しからず」

ゲンドウとリツコは驚きながらシンジを見る。

だが、シンジの方はと言うと、不敵な笑みを浮かべつつ、内心で両者を侮蔑していた。

あんな計画を立てておきながら、この程度で驚くのか、と。

そして、一夏はそんな両者を見詰めながら、更に爆弾を投げ込んだ。

「そして、只今を持ってエヴァンゲリオン初号機は我々特務機関ルシフェルが徴収致します」

「……………」

二人——ゲンドウとリツコには一夏の言っている意味が分からなかった。

いや、分かっていたが、脳がそれを理解するのを拒絶していた。しかし、それでも現実とは容赦なく降り掛かる。

そして、我を取り戻した時、二人は同時にこう叫んだ。

「な、なんだと（ですって）!?!」

認められる筈が無かった。

初号機は彼らの重要な計画のキーパーソンなのだから。

初号機を渡すくらいなら、世界中のネルフ支部に存在する全エヴァンゲリオンを迷わず引き渡すだろう。

二人、特にゲンドウはそれほどまでに初号機に執着していた。故に、彼らは反発する。

「そんな！何の権限が有ってそんな事をするの!？」

リツコは何時もの冷静な仮面を崩して一夏に対してそう抗議した。ゲンドウも己の出しうる殺気を全て込めて一夏を睨み付けた。

「?お二人が言ったんでしよう。初号機はシンジ様しか乗れない、と」

一夏は先程両者がシンジに対して言った言葉を持ち出す。

だが、一夏はゲンドウのそんな殺気に内心で少したじろいでいた。それはそうだ。

幾ら修羅場を潜り抜けてこの場に立つ程の地位になったとしても、ゲンドウもこの地位に至るまでそれなりの修羅場は潜り抜けている。

そして、ユイが初号機に取り込まれて以来、ゲンドウの心に宿っている狂気も加えると、流石に一夏も怯んでしまう。

だが、それでも一夏はなんとか己を奮い立たせて冷静な対応を行った。

一夏も伊達に修羅場を潜っている訳では無かったのだ。

「現在、国連ではパイロットが居ない組織に高価なエヴァンゲリオンを預けるなどという贅沢は許されていません。それなら、エヴァンゲリオンを運用できるパイロットが居て、国連にきちんと認可されている組織が運用する。当然の理屈でしょう?」

「そ、それは・・・」

確かに理には叶っている。

だが、初号機はレイも乗れる。

それを考えれば、シンジしか乗れないという訳ではない。

そう考えて反論しようとしたが、一夏が先に釘を刺した。

「ああ、それと、初号機に乗れるもう1人のパイロットですが、彼女が大怪我をしているという事はこちらも掴んでいる為、彼女は少なくとも現段階ではパイロットとしてカウントされていませんので悪しからず」

「——!?!」

先手は打たれた。

しかもネルフの1級機密足る綾波レイの存在と様子まで知っている。

それだけでも驚きだったが、問題はもう自分達のガードが全て無くなってしまったという事だ。

もはや、反論する術は無く、沈黙を選ぶしかゲンドウ達に道は無かった。

そして、それを見ていたシンジは内心で嘲笑していた。

(もっと、何かしてくるかと思っただけど・・・この程度か。こんなのに僕は利用されていたんだな)

シンジはつくづく前の自分の愚かさを嘆いていた。

前の自分にとって、ネルフとはある意味で戦う仲間であり、ある意味で恐怖の代名詞だった。

自分をサポートする一方で、14歳の子供に友達を殺すよう強要する1面など、ただでさえ気の弱い14歳の子供だったシンジには吐き気を催すような存在だった。

勿論、それが一方的に間違っているとは言えない。

実際、補完計画を発動するまでは、人類を守るといふ事に忠実した組織だった事は変えようの無い事実であったし、もしネルフが居なければ補完計画発動前に人類が滅んで、シンジが此所に居る事も無かつたかもしれない。

だが、そういった事実は理解できても、感情面で納得できるかは話は別である。

加えて、第3使徒戦や第13使徒戦、第14使徒戦に自分達の補完計画の為の行動を起こしていた事もあった。

そういう意味では純粋な人類の為の行動とは言えなかった。

そういう訳で、ネルフとは色々な意味で前のシンジにとって畏怖の存在であった。

だが・・・それがどうだろう。

権力も何も無ければ子供の前に平伏すしかないゲンドウやリツコ、そして、ネルフ関係者達。

前の自分の見ていた世界はかなり狭かった。

シンジはそう認識せざるを得なかった。

その時、天井が僅かに揺れた。

「来たか・・・」

シンジは初号機にゆっくりと進んでいった。

「行くよ、初号機」

その時、心なしか、初号機の目がほんの少し光った気がしたが、その時は誰も気付かなかった。

第弐話 機龍、登場

ルシフェル格納庫

シンジや一夏が行動を起こしていた頃、第3新東京市郊外に存在するルシフェル側が設けた格納庫では、ユウキが酸素マスクや防護スーツを着て機龍に乗り込んでいた。

「スウ……出番、か。緊張するな。シンジの奴もこうだったのか？」

ユウキは実戦は経験しているものの、その中にロボットに乗って戦った経歴など存在しない。

そして、実戦を経験したという自負は時には慢心にも繋がる。

それをよく分かっていたユウキは、これが初陣のつもりでやるつもりだった。

「しかし、よくこんなでかい機械である機龍を收容出来る格納庫なんぞ、郊外とは言えよく造れたなあ」

この格納庫は実戦を想定した際の大規模な部隊の收容所、という名目で造られている。

ルシフェルは表向きは『通常兵器』しか保有していないという事になっている。

機龍の正体がバレればゼーレやネルフが全力で潰しに掛かるかもしれないからだ。

だからこそ、そういう建前が必要だった。

しかし、当たり前だがゼーレもネルフも馬鹿ではない。

当然入念な調査を行ったとユウキは判断していた。

実際にこの格納庫の監視を行っていたゼーレの作業員やネルフ諜報部は何組か居た。

しかし、この格納庫の重要性の割りには少ないとも考えていた。

何か考えが有るのか？

そう思い、破壊工作への警戒も秘密裏に行っていた。だが、そういった兆候は無く、むしろ監視が緩んでいる始末だった。ユウキとしては、ある意味でそれが一番不気味だった。

「まあ、良いや。今はサキエルを倒すこと。それだけに集中していれば良い」

どのみち、今回の戦いでバレるのだ。
なら、徹底的に開き直ろうとユウキは考えていた。

『発進準備、完了！』

『ゲート、開け!!』

そんな事を考えている内に機龍の発進準備が終わり、格納庫上部のゲートが開き。

特殊エレベーターによって機龍は上へと持ち上げられる。

そして、定位置に着くと、ユウキの視界には第3新東京市とその郊外の光景が見えた。

(今頃、ネルフの連中、驚いているだろうな。まあ、どうでも良いけど)

もはや、完全に開き直っているユウキは左方——サキエルの居る方向を睨み付ける。

『ロック解除、開始。……………完了!!』

「よし、行くぞ。機龍！」

偶然だったが、シンジと同じような言葉を吐きながら、ユウキは機

龍の後部に付けられたロケットブースターを全開にしてサキエルに向かつていった。

ネルフ第一発令所

ネルフ本部の第一発令所。

そこは今、現在の主であるネルフではなく、その対抗機関であるルシフェルによって運用されていた。

しかしながら、見慣れない端末なども存在する為、それらを補助する為にネルフ職員も第一発令所に居る。

そして、機龍が出てきた時、ネルフ職員は驚愕していた。

てつきり、ルシフェルは初号機を使って第3使徒を迎撃すると思っていたからだ。

「なんなのよ・・・アレ」

伊吹を含むネルフ職員は機龍の無骨な容姿に不気味さを感じ、半ば恐怖していた。

その光景を格納庫からここまで連行されたゲンドウと冬月も見ていたが、2人は別の意味で驚愕していた。

「おい、六分義。アレは・・・」

「ああ。おそらく、1954年に東京に現れ、そして、東京湾にて倒されたという生物の骨を基にして造られているな。確か・・・名前はゴジラと言ったか」

ゴジラはセカンドインパクトが起きるまでは地球最大の究極生命体と呼ばれていた。

そして、この2人は腐っても10年程前までは生物学者であった。

その為か、ゴジラの存在についても当然知っていた。

「どうする？シナリオには無い事態だぞ？」

「落ち着け。幾らゴジラの骨を基にしていると言っても、ゴジラは使徒ではない。故に、あの機体はA・Tフィールドは張れないし、破れない。最終的には初号機によって止めを刺されるだろう」

「・・・ああ、そうだろうな」

冬月は概ねゲンドウと同意件だった。

確かにエヴァが使徒を基にしているのに対して、ゴジラは単なる生物である。

当然、使徒特有のものであるA・Tフィールドは張れないし、中和する事すら出来ないだろう。

だが――

（初号機と組まれる、という事自体が問題なのだよ。今回は初号機の暴走によってそれどころでは無くなるだろうが、いずれ向こうもA・Tフィールドを張れるようになるだろう。そして、我々はあの機体に装備されている兵器を知らない。そして、その装備している兵器によつては初号機がA・Tフィールドを中和している間にあの機体が攻撃する、という方法も使えるのだからな）

この時点で冬月は初号機はルシフェルに接收されたままになると予測していた。

何故なら、初号機が暴走すれば、当然の事ながら、勝ったとしても運用面でのルシフェルの責任は問われるだろうが、それ以前に初号機を造つたネルフ側にも責任の追求は行くだろうからだ。

パイロットの意思無しに勝手に暴走する兵器。

それがどれほど危険であるかは考えなくとも分かるだろう。

しかも、この1ヶ月前に本部に残されたもう1体の機体である零号機は事故を起こしたばかり。

隠蔽工作は行ったつもりだったが、レイの怪我を知っていた連中だ。

零号機の暴走についても知っている可能性が高い。

そうになると、暴走したとは言え、一応は使徒を倒したルシフェルによつて今後は初号機が運用されるだろう。

そして、今はA・Tフィールドは張れないが、いずれは初号機も張れるようになり、あの機体と組まれれば、非常に厄介になる可能性がある。

(まだ初号機は出てきていない。願わくば、初号機が出る前に使徒があの機体を破壊してくれば良いが……)

冬月はそう願っていた。

だが、彼は知らない。

もはや、暴走はありえないという事を。

そして、ここからは彼らのシナリオから大きく外れた事態となるという事を。

ネルフ 初号機格納庫

「申し訳ありません。シンジ様」

ここはネルフ格納庫。

既にゲンドウ達ネルフ関係者はルシフェル警備部に拘束され、この場から去っていた。

そして、それを見届けた一夏は開口一番、初号機に乗り込もうとするシンジに向かって謝罪した。

「もしかして、僕の名前に“様”を付けていた事？」

一夏はシンジの従者に近い関係であったが、外部ではそれを悟られ

ぬ様、『シンジさん』と呼んでいた。

だが、今回、ゲンドウの気迫に気が動転してしまい、様呼ばわりしてしまった。

これで一夏はシンジと繋がっている事がバレてしまったので、今後の活動に不具合が生じる可能性もある。

そう考えての謝罪だった。

だが、シンジは気にしていなかった。

「構わないよ。どうせ一夏みたいな子供がこの組織に居る事自体で一夏がただの子供でない事は分かるだろうし」

シンジの言っている事は正しいとも言える。

そもそもルシフェルは国連軍を母体にして創られている。

そんな中、シンジや一夏のような子供が居るのはどうしても違和感があった。

故に、ネルフは必然的に一夏に対して疑念を向けていたであろうし、シンジと繋がりがあある事も容易に想像できただろう。

そう考えれば、一夏のミスは大したものではない。

だが――

「はじめは着けたいんですよ。今後の為にも」

これは一夏自身のはじめ。

主の期待を裏切ってしまった事への。

「分かった。でも、今は時間が無いから、後で処罰を言うよ」

「……時間を取らせてしまい、申し訳ありません」

一夏のその声を聞きつつ、シンジは初号機に乗り込んでいった。

第3新東京市 郊外

第3新東京郊外では、機龍によって第3使徒迎撃が行われていた。だが、機龍に装備されたメーサーやミサイル、ロケット弾、レールガンを持つてしてもA・Tフィールドを破る事は叶っていなかった。

「不味いな。やっぱ、A・Tフィールドを破るには初号機かアレしか無い」

先程から使徒が荷電粒子砲によって攻撃していたが、機龍を高起動モードにする事でどうにか、かわしていた。

だが、このままではじり貧だった。

ユウキが不味いと思いかけていたその時、通信機から女性の声が聞こえた。

『ユウキさん、別動隊が初号機の掌握に成功したようです』

「よし。ただちに此方に向かわせてくれ。それと、戦闘機隊はまだか!?!」

「あと5分で作戦空域に到達します」

「それまでどうにか耐えろと言う訳だな。了解した!」

「えっ。ちよっ——」

そう言つてユウキは一旦、通信を切った。

だが、この時、ユウキは冷静では無かった。

あと1分でユウキが頼りにしている“ある物”を積んだ戦闘機隊が到達するのであれば、普通は一旦撤退するべきなのだが、この時ユウキにはそこまで思い付かなかった。

慣れないロボット戦闘がそうさせたのだ。

そして、ユウキはそれに気付かないまま、戦闘を続けていた。

第3新東京市 郊外

ミサト達は第一発令所に居るもの達と違い、外に居た為か、拘束はされていなかった。

だが、第一発令所の様子は知らされていて、ミサトは激怒していたが、機龍が出てきた時は流石に第一発令所に居た職員と同様に驚愕する事となっていた。

だが、戦闘が始まってから、一向に第3使徒にダメージを与えられない様子を見て、やはり初号機に期待するしかないと感じていた。

「それにしても悔しいわね。初号機を連中に接收されるのは」

「仕方有りませんよ。我々の方に初号機に乗れる人間が居ないんですから」

ミサトの言葉に対して、日向は苦笑いをしながら言った。

だが、彼とて、その内面での感情はミサトと同じようなものだった。

「・・・まあ、私たちの方にもろくなマニュアルは無かったし。連中のお手並みを拝見しますか」

・・・ミサトはゼーレ以外の国連上層部が聞いたら卒倒するような事を平然と言っていた。

ネルフは元々、使徒について有益な情報を持っている。

それを売り文句にして予算を得てきた。

だが、ミサトの言葉はそれを真つ向から否定するものであり、これがバレたらゼーレ以外の国連上層部はネルフ解体を声高々に叫ぶだろう。

それほどまでにミサトの言葉は問題だった。

・・・もつとも、ミサトの言葉を聞いている者はネルフ関係者以外

は誰も居なかったが。

その時、オペレーターが一人が叫んだ。

「2時方向から戦闘機が来ます!!」

「戦闘機い。何するつもりかしら」

「さあ？」

2人は疑問に思った。

戦闘機が来たと同時に機龍が撤退を始めた。

そして、戦闘空域まで来た戦闘機はミサイルを切り放す。

ミサイルは使徒の近くまで到着すると、目標に向かって着弾……
する寸前でA・Tフィールドに防がれる。

それと同時に凄まじい閃光が使徒を覆った。